

---

# ずっと君が好きだった

玲風

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ずっと君が好きだった

### 【Nコード】

N9301A

### 【作者名】

玲風

### 【あらすじ】

大切な人を失った旅人ルース。旅の目的は彼女を生き返らせてあげたい。彼女に伝えたいことがあるのだ。彼は笑顔で旅をする。

彼は旅をする。愛する者の為に。いつも笑顔で旅をする。

晴天の空。日差しが容赦なく旅人を照りつける。水も無ければ、食料も無い砂漠を独りで旅をする。

「ふう、暑い。前の町でもう少し水と食べ物を買っとくんだった。」  
不毛の大地で弱音を吐きながらも、旅人は一歩一歩進んでいる。  
彼が旅を始めたのは約三ヶ月前。大切だと心から思う人が死んだのがきっかけだった。恋人など、大それた関係ではなかったが、旅人はずつと彼女を思ってきた。彼女にもう一度生きて欲しくて旅に出た。旅人は弱音を吐いたりよくしているが、絶対に笑顔を絶やさない。笑っていいいいことがあると、小さい頃に言われたことを、未だ信じている。  
もうすぐ、砂漠の町に辿り着く。

「やっとここまで来た。もう少しかな。」

旅人が町に着いてから始めに向かったのは、町の酒屋だった。町に着くと毎回酒屋に行き、酒を飲みながら食事をするのだった。

「ねえ、あんた旅人？」

勢いよく食事をカウンターではおぼる旅人に、一人の女性が話しかけてきた。旅人は口を一杯にしているのでコクコクと頷いた。

「あたしリア。あんたは？」

「ふう。」

「は？夫婦？」

やっと口の中のを胃に流し込んで話した。

「ルース！で、何か用？」

旅人はまたがつがつと食べ始めた。リアという女性も少し引いてい

る。

「いや、なんで旅してんのかと思ってさ。旅人ってここじゃ珍しいから。」

「好きな人を生き返らせてあげたいんだ。まだ、人生の半分も生きてなかったからね。もう一度生きさせてあげようと思ってさ。」

ニコニコ笑いながら話す旅人。その顔には食べかすが付いている。無邪気な笑顔だ。

「それってなんかおかしくない？さもその子の為みたいに言ってるけど、その子は『もう人生に満足した。』って思ってるかもじゃない？」

旅人の顔から笑顔が消えた。キョトンとしている。いきなり初対面の人に旅の意義を否定されたら誰でもキョトンとするだろう。もちろんリアが言うことは間違っては無いはずだ。

「リアに俺の旅を否定する権利ないと思うけど。」  
少し怒っているらしい。目つきがキツイ。

「別に否定なんかしてないわ！だっておかしいじゃない！その子の考えとか全部知ってるわけじゃないのに『彼女の為』とか言っちゃってさ！結局は自分のためなんじゃないの？自己満足よ！」

「初対面のあんたにそこまで言われる筋合い無いだろ？俺のことなんだからほっとけよ！」

そう言っただけ旅人は金をバンと置いて出て行ってしまった。

そこまで起こるのはもしかすると凶星なのかもしれない。『彼女の為』じゃなくて『自分の為』。彼の頭はパンクしそうだ。どれだけ考えてもわからない。彼女が「生き返りたくない」と言ったら旅の意味が無くなる。

「どっししたらいいんだろ？」

その夜、旅人は小さな高台にのぼり月を見ていた。

「そっか、そうなんだ。難しく考えなくていいんだ。」

どうやら答えが出たらしい。

旅人が朝一番向かったのは酒屋だった。酒屋のマスターにリアの家を聞いた。

リアの家の玄関の脇に座った。

ガチャ

ドアが開く音がして寝起きっぱいリアが出てきた。

「ゴメン。」

「へ？あ、旅人。こんな朝っぱらから何でいるのさ？」

「謝りたくて。昨日の答え出たんだ。俺は旅を続けるよ。でも、彼女の為じゃなくて、自分の為。『俺』が彼女に逢いたいんだ。」

やはりニコニコとする旅人。リアももう怒ってはいないようだ。

「ふ〜ん。そんなこと言うんだったらさっさと行けばいいのに。：

まあ、神の神殿目指して頑張りなよ。」

神の神殿とはこの町を出て砂漠を抜けたところにある。全ての魂が集まるところで、死者を生き返らせることもできるらしい。

「ありがとう。」

旅人はまた砂漠を歩き出した。残りはもう少しなので顔が緩んでいる。

「アーシエ。もうちょっとで逢えるんだな。俺、伝えたいことがあるんだ。」

アーシエというのは多分彼の旅の目的、生き返らせたい人なのだろう。

一週間後にようやく『神の神殿』に辿り着いた。

「そなたは何を望む？」

これは神の声である。その声に旅人は少し驚いたが、ニコツと笑った。

「アーシエ・レミアムに逢いたいんです。」

「暫し待たれよ。」

そう神の声が告げた。旅人はまたニコツと笑う。

少ししてから目の前にアーシエらしき人物が現れた。もちろん幽霊だが。

「アーシエ、久しぶり。」

「うん、久しぶり…えつと折角ここまで来てくれて悪いんだけど、あたしは生き返らなくていいの。人生は短かったけど、楽しかったから…」

すまなそうなアーシエ。それを見て旅人は笑った。リアと同じことを言ったからだ。

「アーシエ、君がそういうなら無理強いはしないよ。でも、俺は君に伝えたいことがあるんだ。言っただけでなかつたなと思って。」

「…何？」

旅人は一つ溜め息をついた。

「ずっと君が好きだった。」

少し照れる旅人。アーシエは驚いて一瞬声を失った。たったそれだけのために？という顔をしている。

「あたし…ルースのこと…」

この先の答えは旅人だけのもの。『好き』かもしれない。好きでも、『恋愛じゃない』かもしれない。それを知るのは旅人だけ…

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9301a/>

---

ずっと君が好きだった

2010年10月11日20時16分発行